

講師のことば

ここまでの長い道のりに想う

タワーホール船堀に江戸川区女性センターが開設されたのはタワーホールが落成した翌月、1999年（平成11年）4月でした。男女共同参画事業の推進拠点として、相談室だけでなく、図書の貸し出し、啓発活動をおこなっていました。6月に男女共同参画社会基本法が施行されています。翌年、センターの隣に、当時の私の所属であった区史編纂室が移りました。そのご縁で、女性史の講座を依頼されたのが始まりでした。2001年（平成13年）、まだジェンダーという言葉が浸透していなかった頃、「女性史とは何か」というテーマで講座が始まりました。すでにフェミニズム運動とよばれる大きな波があって、女性史というジャンルや聞き書きの実績などもみられましたが、素人の私には毎日が勉強でした。5回連続の講座で、毎回100名前後の受講生に支えられて、無事終了しました。

その頃の女性史の実践活動として、多くの自治体で女性のライフヒストリーを聞き取り、それが刊行されるようになっていました。女性の生きてきた姿を記録し、名もなき声を可視化するものでした。江戸川区でも女性の生活の聞き取り事業が計画され、女性の生きてきた姿を女性の手で聞き取るという方針のもと、2009年（平成21年）9月に「女性史聞き書き研究会」という名の講座（12月まで6回連続）を開催して、聞き手となる女性の発掘と養成をおこないました。この時はコーディネーターとして磯谷真理子さんを迎え、女性の立場から講座を支えていただきました。終了後の12月、グループとしての「女性史聞き書き研究会」が誕生し、聞き取りの実践が始まりました。以来、女性センターと協働して、ほぼ月1回の講座兼定例会で、インタビュー・文章化・女性をめぐる社会情勢の勉強など、会員のスキルアップを図るとともに、取材結果や原稿をみんなで検討しました。女性が、女性の過去を聞き取り、それを文章にまとめるという方法で話者おひとりを1枚のリーフレットにまとめました。これが「えどがわの女性」です。最初は2年計画だったように記憶していますが、年間10点くらいという見込みがなかなか達成できず、次第にメンバーも減少していきました。

その後、人権や性に対する社会の意識の変化もあって、2020年（令和2年）4月には、江戸川区女性センターが瑞江の江戸川区人権・男女共同参画推進センターに統合されました。リーフレットも2023年（令和5年）度で終了することになり、50人が目標となったものです。途中まで、磯谷真理子さんにもアドバイスをお願いし、極力女性の手で世に送り出すことに努めました。私は、ファーストコンタクトには一切かわらず、ひとりを除いてインタビューの現場にも行かず、インタビューの方法や文章の書き方、構成・表現の方法などに、定例会の場で助言してきました。のべ40人前後いた研究会メンバーも、最終回となった2024年（令和6年）3月の第156回定例会では4人でした。

このたびこの長い道のりの最後に、これまでの成果を合冊して、記録に留めることができました。話者となってくださった50の方々にあらためて厚くお礼申し上げます。聞き手となった会員の皆様、支えて下さった旧女性センターはじめ多くの方々に感謝申し上げます。

2025年3月

元江戸川区郷土資料室学芸員 樋口政則